

金沢大学附属図書館報

ワシントン大学(シアトル)図書館を視察して

附属図書館長 鹿 島 正 裕



ワシントン大学(スザロ)中央図書館前景

全支出3,600万ドル、つまり約15億円と43億円で、内寄付金が1.6億円ほど。これらの数字は、金沢大学より学生数・教員数・図書館蔵書数及び資料費は4倍前後にとどまっているが、図書館正規職員数は、なんと10倍以上に及んでいる。寄付金は、金沢大図書館に限らず、日本の大学図書館では積極的に集めることができずにいる。ワシントン大図書館は、2004年に全米優秀大学図書館賞をもらったそうだから、アメリカの大学図書館が皆これほど充実しているわけではないのだろう。

ワシントン大学とは

文部科学省の国際化推進事業補助金をいただいて2007年2月中旬より3月下旬にかけてワシントン大学に客員研究員としてお世話になり、国際学教育や国際交流活動の調査と国際関係論講義の研修をした際に、図書館をよく利用し、リザベス・ウィルソン館長とお話することができた。金沢大学附属図書館のあり方とは想像以上に違ったので、以下に簡単な報告を行い、読者の参考にしていただこうと思う。

同大学は、ワシントン州の州立大学で、1861年創立、学生数は学部生が31,500人、大学院・専門職プログラム生が11,500人ほど、教員は3,500人、教職員総数は25,500人（明らかに非常勤を含め）という大組織である。その図書館は、中央館以外に学部生用図書館（授業教科書、自習室、パソコン・ラボなど）、諸専門図書館（日本の図書などを集めた東アジア図書館を含め）、地方の2キャンパス図書館など24施設を持ち、書籍664万冊、定期刊行物56,000種を擁する。職員は、司書150人ほどを含め正規が500人ほど、学生のパートタイマーも500人ほど雇用している。年間運営費は資料費1,250万ドル、

金沢大学との違い

こうした数字にも表れている、両大学の大きな相違点をまとめてみよう。第一に、図書館長が、私のように教員の兼職ではなく、職員（専門司書）の本務になっていること。ウィルソン女史は、北米専門司書協会によって2007年の最優秀専門司書に選ばれたそうで、ワシントン大学でも、部局長会議（Board of Deans）の議長として重用されている（教授以外が議長になったのは初めての由）。専門司書は大学の蔵書の選択・収集を任されており、各専門分野で修士号や博士号を持つ専門家で、地位が高いのだ（この点については次項で述べる）。図書館の運営については、7人の副館長からなる「キャビネット」と、25人の中間管理職からなる「カウンシル」の助けを受けており、また15人の教員からなる「ファカルティー・カウンシル」が資料収集に協力しているようだ。

第二に、大学の資料収集予算は100%図書館が管理しており、教員個人には分配されていないこと。専門司書たちが、教員・学生の要望を聞きながら、書籍や雑誌の選択・購入を行っており、したがって各分野の研究・教育に必要な

資料が体系的に収集されている。例えば、私が調べた国際学関連図書は各国言語による専門書を揃えており、非常に充実している（専門司書150人が、合計70以上の外国語に通じているそうだからそのようなことができるのだろうが、もちろん国際学に限った話ではない）。金沢大学では、教員の研究テーマ関連図書のみがその教員の研究室にあるのが普通だから、学生が図書館に行ってもあまり専門書はないし、教員も金沢大学着任後、自分の研究テーマに関わる文献を自分で収集しなければならない。ワシントン大学では、専門司書が教員・学生の希望する研究テーマについて、参考文献を探し、見つけ、必要なら購入するといったサービスを行っており、彼らなくして同大学の研究・教育は成り立たないわけだ。

このように研究・教育に役立つ大学図書館を創り上げるには巨額の予算が必要で、寄付金集めに熱心なのが第三の違いである。副館長の一人は寄付金集めの専従だそうで、だいたいワシントン大学は学長にしてからが研究・教育に優れた教授ではなく、行政と資金集めの専門家を州知事が任命している（北米の大学ではそうした学長が普通なようだ）。大学全体の資金集めとは別に、図書館も「図書館支持者(advocates)カOUNシル」というボランティア委員会を通じて寄付金を募り、2005 - 2006年度に134万ドル集めた由だ。その内訳は、卒業生44%、友の会16%、企業15%、財団14%など。卒業生はワシントン州出身者が多いだけに愛校心、愛郷心が強いのだろう。また、図書館が（金沢大学同様）市民に開放されていて、誰でも自由に入館して図書を閲覧できる（借用や電子ジャーナルの利用には制限があるが）ので、市民が大学図書館を自分たちの公共財と感じられるのかもしれない。

第四に、図書館がメディア利用教育を担っていること（金沢大学ではメディア基盤センターと図書館がその仕事を分担している）。機関リポジトリは両大学にあるが、ワシントン大では現在学術データの提供が中心だそうで、金沢大学のリポジトリ KURA で現在コンテンツの中

心となっている大学紀要論文は、ワシントン大にはそもそも存在しない。北米の学術雑誌は、一部の大学出版局や民間の出版社が刊行しているからである。図書館長によると、それらに掲載された論文の「著者最終稿」の提供を呼びかけているが、教員は忙しいし面倒なのでなかなか応じてくれない、そこで学生の修士論文や博士論文を載せようとしているとのことであった。

図書館長への質問の最後に、「いわゆるデジタル化によって、学生が図書館に来なくても情報が得られるようになってきているが、図書館の今後の役割をどう考えるか」と伺ったら、「それはむしろ好機だと考える。情報を得るだけなら図書館に来なくても、自宅のパソコンでもできるかもしれないが、図書館は人々が集まって共に研究したり議論する場を提供できるし、今後そういう役割に力を入れるべきだ」とのことであった。

日本の大学図書館

金沢大学図書館も機械化・デジタル化などの技術面では負けていないと思われたが、蔵書、専門司書による研究・教育支援の面では残念ながら太刀打ちできない。大学そのものの人的・財政的規模が大きく異なるために、図書館の人員や資料費予算の規模もとうぜん異ならざるを得ないが、そもそも図書館の役割の概念がそうとう違う。あるいは理系では、電子ジャーナルを多数契約してあればよいのかもしれないが、文系では国内外の専門書の収集を専門司書に委ねるという発想自体、日本の大学図書館にはないと思われる。たとえばJETRO アジア経済研究所の図書室では、文献収集のために専門家を雇用しているが、総合大学の図書館がそのようなことをしようとすれば、ワシントン大学のように150人なりの専門司書を雇用する必要がある。本学図書館も司書を20名擁するとはいえず、量質共に抜本的に改善しなければならない。ともあれ、学生諸君は、レポートや卒業論文を書くための文献収集に際しては、図書館職員に遠慮なく相談していただきたい。